

2021/8/26-1

(うと Q 世話し 今時点分かっている範囲での「常態 (ノーマル)」)

副題：ニューノーマル探索サバイバル日記中間報告

冒頭からいきなり申し上げますと色々ご意見を戴きそうですが敢えて記しますと

「色々人類の存続なり永続を考えてきたが、そもそも人類の存続はともかく「永続」などと言うのはあり得ない」

と言う事です。

漢語的に申せば

「生者必滅、会者定 (常) 離」

それこそが

「常態 (ノーマル)」

是道理。

「滅 (ほろぶ)」と書くといささか反発をかいそうですが、この「滅」を「新陳代謝」と置き換えると少しはご納得戴けるのではないのでしょうか。

つまり何も人間社会に限らず物事が「存続」するには「新陳代謝」による「入れ替わり」即ち「流動化、活性化」が必要だと言う事です。

「不動」ではなく「変化、変容、変遷」が必要でありそれが又「常態」であると。

古来ファラオのピラミッドに始まり現代に至る迄、時の王たちは我が世の春とその権勢を永遠に残さんが為にあらゆる画策を行ってきた様ですが、ひょっとするとそれらは全く無駄な愚行だったのかもしれない。

後代の人が事跡を称えると思っているのかもしれませんが、いずれかの日に人類とて例に違 (たが) わず消滅するのが道理であるならば、その事跡を称える人そのものがいなくなってしまうのですから意味があるのかないのかは直ぐにも分かるでしょう。

万人が知る彼のレオナルド・ダ・ビンチの名とその事跡すら残らないのですから。

仮に自分とその事跡だけは例外だと思っているのだとすれば過去の王たちも例外なく皆そう思っていたと言うだけの話でしょう。

とすれば、この世にいる間はそんなものを求めず、追い掛けもせず自分が好きな事、楽しいと思う事、興味を引かれる事をやって暮らした後、静かに天に召された方が余程ましな様な気がして参りました。

そもそも「生きる意味」とか「生きるに値する価値」等と言い始めるから上下、高低、貴賤の階位序列が発生するのであって、過度の意味づけや価値評価を行わず

「何をしたいのか」

「何が面白いのか」

「何をしていると充実を感じられるのか」

即ち前者の肩書き尊重の「名詞主体の文化」からその時々に行為や中身を重視する「動詞主体の文化」に切り替えた方がいい様な気がしております。

今確かなのは「この世の生はこの一回限り」

と言うところ迄。

無論輪廻転生や天国の存在など色々な考え方があるのは存じておりますが、今時点で間違

いなく言えるミニマム保証は

「今生の生はこの一回限り」

と言う迄でしょうから。

そうしてそれを承知した上で改めて

「それでは一体「自分は」何をどうしようと言うのか？」

ニューノーマル探索サバイバル日記シリーズの後半はその辺を探ってみたいと思っております。

追記)

今分っているのは

「肩書きに重きを置く名詞文化は他人の側に殺生与奪の権があり、行為、行動に重きを置く動詞文化には自分の側にそれがあってそうだ」

と言う処迄です。